

米 women.com Networks CEO
Marleen McDaniel

マーリーン・マクダニエル

世界一の女性サイトから
日本へのメッセージ



interview

現在、日本をはじめ各国で女性サイト業界が活性化している。いまや女性はEC市場における主要なマーケットであり、女性を制すものがECビジネスを制すと言っても過言ではない。そんななか、こうした女性サイトブームの火付け役となった米国の大手女性サイト、Women.comを運営する米ウーマン・ドット・コム・ネットワークス社の会長兼CEOであるマーリーン・マクダニエル氏が、第5回 国際女性ビジネス会議で講演をするため来日した。米国のインターネットユーザーの7パーセントにあたる500万ヒットを叩き出すサイトを産み出した同氏に、インターネットと女性の関係について聞いた。

聞き手：倉園佳三 / 本誌編集長
Photo: Watari Tokuhiro

☎：現在の日本には、子供を出産した女性が仕事を続けるのが難しいなどの問題があります。インターネットによってこうした不条理が少しは解決すると思いますか。

マクダニエル：インターネットによって自宅で仕事ができるようになれば、仕事と子育てが両立するという考え方もありますが、私はこの問題が必ずしも環境だけに起因しているとは思いません。私はこれまで、6つのハイテク関係の会社を経営してきました。子供も2人もうけました。おそらく、私ほど仕事に一途な女性はそうはいないでしょう。そういった私の経験からいうと、現在の環境でも仕事を持つ女性が子供を育てるのは、決して不可能なことではないと思います。

インターネットは、自宅で仕事することを可能にすると思います。しかし、管理職や編集長にはそれが許されません。自宅で仕事ができるかどうかは、どれだけの人とコンタクトする必要があるかによって決まると思います。ウーマン・ドット・コム（以下、ウーマン・コム）には、子供を持つ女性の役職者が3人います。私は社員に、「どんどん子供を作りなさい」と薦めています。産休は3か月与えられます。ただし、会社に復帰しないとすれば、当然、職は失います。

インターネットによるビジネスをすべて自宅でやるのは難しいかもしれませんが、なかには自宅で仕事をして成功する人もいます。私の場合、会社に来て働いている多くの部下がいますので、自宅ですべての仕事をするとういうことになるのか、想像もつきません。

☎：たとえば、自宅で仕事をするようになると、子供たちは親の働く姿を見て育つようになります。自営業の親を持つ子供は、両親がなにをやってお金を稼いでいるのかわかっています。しかし、会社員の子供は親の職種さえ知らないことがあります。親を尊敬するためには仕事ぶりを知ることが重要だと思いませんか。

マクダニエル：それならば、自宅で仕事をするよりも、親が子供を会社に連れて行き、なにをやっていのかを見せてあげればよいのではないのでしょうか？

私の子供は小学校の6年生になると、子供ながらに「なにかきちんとビジネスをやらなければいけない」と考えはじめました。なにか作って、それを売って、それに対して支払いの小切手をもらうというビジネスをです。そして子供はクッキーを作りました。私はそれに対してお金をあげたわけです。

子供たちが現実の社会でどうやって過ごすべきなのか、学校がもっと教えるべきなのかもしれません。私は夏休みに、2人の子供をコンピュータキャンプに入れました。ここで、プログラミングやウェブページのデザイン、マルチメディアなどを勉強して行くのです。私が子供のときは、環境が大きく違いますね。

☎：もしかしたら日本は、そういった機会が少ないのかもしれませんが、おっしゃるとおり、インターネットによって家庭や仕事だけでなく、教育のあり方も変わってくると思います。現在、日本の学校では、すべての生徒が同じプログラムを学んでいます。ですが、たとえばインターネットで自宅学習できるよ

世界中で私たちがほど
女性とはなにかを知っている企業はない。

うなシステムができれば、それぞれの子供にあったプログラムを独自に選べるのではないのでしょうか。

マクダニエル：日本は変わってきているとは聞きますが、「終身雇用」とか「父親が勤めている会社に入る」とか、まだまだ古いシステムが残っていると思います。こういった古い部分が日本人を失速させているのではないのでしょうか？ 特に「創造性」が失速すると思います。もっともっと選択肢があっていいと思うのですが。

☎: インターネットは、そういった選択肢を増やすものになり得ると思いますか？

マクダニエル: 部分的にですが、インターネットがそれを提供できると思います。私自身は、日本の将来を変えられません。ですが、日本の若い世代なら、今後の日本社会をもっともっと変えていけると思います。それこそ、若い世代が活躍できるように「より平等なステージ」をインターネットによって作り出せると思うのです。

ですが、私が見る限りでは、政府や大企業存在にまだまだ問題があるのではないかと思います。それらはなかなか打破しにくいものです。やはり大企業にばかりお金が集まってしまいます。政府はもっと、中小企業を振興させるような策を練るべきで

す。そうすれば、ベンチャーキャピタルの投資ももっと盛んになってくるでしょうし、「革新的な動き」も出てくると思います。

『われわれは、ウーマン・コムに訪れるユーザーは“アタマのいい女性”だと断定して話しかけています』

☎: ウーマン・コムではさまざまなコンテンツがありますが、基本コンセプトはどういったものでしょうか？

マクダニエル: ウーマン・コムのサイトには、健康保険、金融、美容、ロマンスなど、全部で18のサブジェクトがあり、同時に『Women』や『Game』といった雑誌を11

誌も提供しています。つまり、非常に多くのものを提供しているのです。

われわれは、ウーマン・コムに訪れるユーザーは「アタマのいい女性」だと断定して話しかけています。たとえばファッション雑誌などでは、「を着なさい」と言います。「なにが流行なのか」「遅れているのはなにか」を教えるわけです。しかしウーマン・コムでは、ただ、ぱっと見せるだけなのです。そして、「これを着ますか？」と問いかける。あくまでも、女性が自分で選んでいるような気にさせることが重要なのです。要するに、ほかの女性サイトとは、取り組む姿勢がまったく違うのです。こちらのほうが、より「モダン」だと思います。

また、ウェブデザインや機能の面から言っても、非常にすぐれていると思います。ウーマン・コムでは、ユーザーの体験（ユーザーエクスペリエンス）に技術が顔を突っ込んでこないように心がけています。技術を使って使いやすさを向上させるわけですが、それを前面に押し出してしまうと、ユーザーはかえってイライラしてしまうものです。ウーマン・コムでは、完全とは言いませんが非常に進んだ手法を使うことで、この問題を解決しています。

一方で、われわれは「女性そのもの」をよく研究し、調査しています。常に「なにが買いたいか?」「買いたくないものはなにか?」を尋ねているのです。

また、特殊なメガネをかけてもらってわれわれのサイトにアクセスしてもらい、視線がどこにいくかを調べることで、ユーザーがどこに興味を持つかを研究するといったことも行っています。

実に長い間、われわれは女性について研究してきました。単純な考え方だともうかもしれませんが、世界中で私たちほど女性のことを知っているところはないと思います。

『電子レンジをあきらめてもインターネットはあきらめないで』

☎: ウーマン・コムが女性についてそれだけよく理解していることが、女性の生活にどのような影響を与えていると思いますか？



マーリーン・マクダニエル

米 women.com Networks, Inc CEO

1994年よりウーマン・ドット・コムに携わり、女性のためのコミュニティの場として同サイトを業界トップの座にまで育て上げる。また、同氏が立ち上げに参加した企業には、スリーコム・コーポレーションズ、サン・マイクロシステムズ、シスコ・システムズなどがある。

M a r l e e n M c C a r r



マクダニエル: ウーマン・コムの子供ユーザーだけでなく、世間に対しても「女性にはパワーがあるのだ」というイメージを与えていると思います。われわれはユーザーに、「電子レンジをあきらめても、インターネットはあきらめないでください」と言っています。子供たちが寝静まったあと、夜中にインターネットをする。暮らしが違えば、必要とするものも違うでしょう。ですが、インターネットとは情報であり、エンターテインメントであり、そしてまた、人間の生活をサポートしてくれるものなのです。ありとあらゆる生活そのものが、そこに詰まっているのです。(本誌の表紙右上を見て)みんなお互いに「Internet People」なので、おそろく、社会が失ってしまった空間をここを通して経験しているのではないのでしょうか? インターネットはそれだけ、「パーソナルなもの」だと思います。

☞: インターネットでビジネスをするうえで注意してきたことはなんですか?

マクダニエル: 自分がインターネットのビジネスで成功しているのか、それとも失敗しているのかは、実際にその戦場にいるときには判断しにくいものです。ですが、なにかしらの基準があるはずですから、自分の置かれた状況をきちんと測定しなければいけないと思います。多額の収益を上げるまでには、かなりの時間がかかるでしょう。そうすると、事業に対する情熱、忍耐力、自分がどれだけ心の安定を求めているかの度合いなどが試されるでしょう。なかには、「簡単よ!」と思う人もいるでしょう。ですが、現実はやさしいなどといったものからは、ほど遠いと思います。

『お金をつかって洋服を仕入れ、在庫を持ってeコマースを始めましたが、まったく売れませんでした』

☞: ウーマン・コムでいままでに失敗だったコンテンツはなんですか?

マクダニエル: 「eコマース」です(笑)。う



んとお金をつかって洋服を仕入れ、在庫を持ってeコマースを始めましたが、まったく売れませんでした。もし、eコマースをやり続けていたら、おそらくわれわれは会社のお金を全部つぎ込み、結果的には数枚のシャツしか売れないといったことになっていたと思います。実際には、2か月でストアを閉鎖しました。だれでもこういった過ちはおかすと思います。ただ私は、閉鎖という決断が早かったと言えるでしょう。

☞: 現在の収益モデルはなんですか?

マクダニエル: 80パーセントは広告です。あとは、15パーセントがほかのウェブサイトのプロデュース料で、5パーセントが占いや本などを中心としたeコマースです。まだまだ満足していません。売り上げをもっと増

ばしたいと思っています。

☞: 女性にもっとも不人気だったコンテンツはなんですか?

マクダニエル: 「money」です。お金はほしいが、どうやって儲けるのかの勉強はしたくないと(笑)。

☞: 最後に、本日の会議(P.192参照)に集まった日本の女性たちと交流してみて感じたことを教えてください。

マクダニエル: とても知性があります。非常に積極的で、エネルギーに溢れて……。『恐れを知らぬ』といった感じでした。

☞: ありがとうございました。 ●●



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp